

原 寛*: 東亜植物註解 (5)**

Hiroshi HARA*: Comments on the East Asiatic plants (5)**

21) クロマツ 日本の代表的植物として最もよく知られているクロマツも、その学名については異説がある。*Pinus Thunbergii* Parlature (1868) には先行名があるので用いられないとして、*Pinus Thunbergiana* Franco (1949) の名がすでに提起されている。先行名とされたのは *Pinus Thunbergii* Lamb. (1824) であって、一見 Franco の説は正しいようにみえる。この先行名は *Pinus Kaempferi* Lamb. と同一個所に発表されている。後者は Thunb. が *Pinus Larix* L. にあてた日本の植物に名付けたものではっきり Kaempfer の 'Seosi' の記述が引用されており、それがカラマツであることが明らかなので、この種名に基いた *Larix Kaempferi* (Lamb.) Carr. がカラマツの正名とみなされる (Taxon 26: 585, 1977 参照)。一方 *Pinus Thunbergii* Lamb. の方は、Thunb. が *Pinus Abies* L. とした日本植物に名付けた名であるが、Thunb. は単に L., Sp. Pl. ed. 2, 2: 1421 (1763) の *Pinus Abies* の記相文をそのまま書写しただけで日本植物についての記載語は何もなく、これを引用しても新名を正当出版したことにはならない。産地は記されているが、標本も図も残っていない。いいかえれば *Pinus Abies* L. sensu Thunb. を引用しても L. の記載そのままなので新名の発表を正当化する記載の引用とは認められず、従って *Pinus Thunbergii* Lamb. は裸名とみなされる。Index Kewensis も *Pinus Kaempferi* Lamb. は採録しているが、*Pinus Thunbergii* Lamb. は引いていない。

上記のような理由で、クロマツの学名は幸い我々に馴染み深い *Pinus Thunbergii* Parlature が正名である。

Pinus Thunbergii Parlature in DC., Prodr. 16(2): 388 (1868). Hunt in Bot. Mag. 177: n. s. t. 558 (1969); non *Pinus Thunbergii* Lamb. (1824), nom. nud.

Pinus sylvestris L. sensu Thunb., Fl. Jap. 274 (1784), pro parte.

Pinus Massoniana Lamb. sensu Sieb. et Zucc., Fl. Jap. 2: 24, t. 113 & 114 (1842).

Pinus Thunbergiana Franco in Anais Inst. Super. Agron. Lisboa 16: 130 (1949).

* 東京大学総合研究資料館植物部門. Department of Botany, University Museum, University of Tokyo. Hongo, Tokyo.

** Continued from Journ. Jap. Bot. 52: 257-262 (1977).

Distr. Honshu, Shikoku, Kyushu (south to Tokara Isl.), C. & S. Korea.

Pinus Thunbergii Lamb. (1824) was named for a Japanese plant which was referred to *Pinus Abies* L. by Thunberg, but under *Pinus Abies*, Thunberg in Fl. Jap. 274 (1784) just copied its diagnosis from *Pinus Abies* of Linnaeus (1763), and did not add or change any descriptive phrase, so *Pinus Thunbergii* Lamb. was not validly published, and is regarded as nom. nud.

22) ズミ 本州に普通なズミの学名には *Malus Sieboldii* (Regel) Rehd. が広く用いられているが、最も早く正当に出版された正名は *Malus Toringo* (Sieb.) Sieb. である。このことはすでに小泉博士が詳しく書かれていて、その基準形は小形の黄果をつけたキミズミである。*Pyrus Sieboldi* Regel は発表時に *Sorbus Toringo* Sieb. を引用しているので superfluous name であり不適法名である。

北海道に多いエゾズミは本州中部のズミと比べると、葉は少し大きくなり分裂する程度が少なく、花も果も一まわり大きく、果は径 8-12 mm になり、花弁は円味があって縁が重なりあう傾向がある。*Malus Sargentii* Rehder は室蘭産の低木性で枝を横にひろげたエゾズミの一形に名付けられ、直立した高木性のズミは *M. Sieboldii* var. *arborescens* Rehd. として区別された。しかし樹形による区別は難かしい場合が多く別変種として扱う程のものではないと考える。オオズミについては Rehder は雑種であるとの説だが、ここでは浅見博士の見解に従ってズミの一変種として扱っておく。

Malus Toringo (Sieb.) Sieb. ex Vriese in Tuinb. Fl. 3: 368 cum tab. col. (1856), excl. fl.—Matsum., Ind. Pl. Jap. 2(2): 205 (1912)—Koidzumi, Consp. Rosac. Jap. 80 (1913)—Nakai, Fl. Sylv. Korea. 6: 35, t. 10 (1916)—Koidzumi in Acta Phytotax. Geobot. 3: 182 (1934)—Hara et al., Fl. Karuizawa 207 (1974).

var. **Toringo**.

Sorbus Toringo Sieb. in Jaarb. Nederl. Maat. Tuinb. 1848: 47 (1848), cum descr. in adnota.

Pyrus Sieboldi Regel in Ind. Sem. Hort. Petrop. 1858: 51 (Jan. 1859), nom. illegit.; in Gartenfl. 8: 82 (1859).

Malus baccata subsp. *Toringo* (Sieb.) Koidzumi in Bot. Mag. Tokyo 25: 76 (1911).

Malus Sieboldii (Regel) Rehder in Pl. Wilson. 2: 293 (1915)—Asami, Crab-appl. & Nectar. Jap. 38, f. 26-35, t. 19 & 20 (1927)—Rehder in Journ. Arn. Arb. 13: 308 (1932); Man. Cult. Tr. & Shr. ed. 2, 395 (1940); Bibl. 273 (1949)—Yü et Yen in Acta Phytotax. Sin. 5: 97, t. 12 (1956)—Ohwi, Fl. Jap. rev. ed. 775 (1965)—Kurata, Ill. Imp. For. Tr. Jap. 4: 28, t. 14 (1973)—Yü et Ku

in Fl. Reip. Pop. Sin. 36: 388 (1974).

Pyrus Toringo Sieb. ex Miq., Ann. Mus. Bot. Lugd.-Bat. 3: 41 (1867).

Malus Sieboldii var. *Koringo* Koidzumi in Bot. Mag. Tokyo 30: 331 (1916), p. p., nom. illegit.

M. Toringo var. *Koringo* (Koidzumi) Koidzumi in Acta Phytotax. Geobot. 3: 183 (1934).

Distr. Honshu, south to Kyushu, Korea, and China.

var. **Sargentii** (Rehder) Schneid., Ill. Handb. Laubh. 1: 723 in observ. (1906).

Malus Sargentii Rehder in Sarg., Tr. & Shr. 1: 71, t. 36 (1903)—Bean in Bot. Mag. 144: t. 8757 (1918)—Rehder, Man. ed. 2, 395 (1940).

Pyrus Sargentii (Rehder) Bean, Tr. & Shr. 2: 293 (1914); non Hort. 1902.

Malus Sieboldii var. *arborescens* Rehder in Pl. Wilson. 2: 294 (1915), quoad pl. ex Hokkaido.

M. Sieboldii var. *Koringo* subvar. *Sargentii* (Rehder) Koidzumi in Bot. Mag. Tokyo 30: 331 (1916).

M. Sieboldii var. *Sargentii* (Rehder) Asami, l. c. 40, f. 37-40, t. 21 (1927), cum f. *ascendens* Asami.

M. Toringo var. *arborescens* (Rehder) Koidzumi in Acta Phytotax. Geobot. 3: 183 (1934).

M. Toringo var. *Koringo* subvar. *Sargentii* (Rehder) Koidzumi in Acta Phytotax. Geobot. 3: 183 (1934).

Distr. Hokkaido and N. Honshu.

var. **Zumi** (Matsum.) Hara, comb. nov.

Pirus Zumi Matsum. in Bot. Mag. Tokyo 13: 1 (1899).

Malus Zumi (Matsum.) Rehder in Sarg., Tr. & Shr. 1: 191, t. 91 (1905); in Pl. Wilson. 2: 292 (1915); Man. ed. 2, 394 (1940); Bibl. 272 (1949)—Koidzumi in Acta Phytotax. Geobot. 3: 184 (1934).

M. baccata var. *mandshurica* f. *Zumi* (Matsum.) Matsum., Ind. Pl. Jap. 2(2): 204 (1912).

M. Zumi (Matsum.) Matsum. ex Koidzumi, Consp. Rosac. Jap. 92 (1913).

M. Sieboldii var. *Zumi* (Matsum.) Asami, l. c. 41, t. 22, 23 & 42d-f (1927).

Distr. Japan.

23) ナガボノシロワレモコウ 群馬県館林附近の湿地にあるナガボノシロワレモコウはみな小葉の下面に白短毛が密生していることを松沢篤郎氏が見出し、その研究を委ねられた。文献によると *Sanguisorba tenuifolia* 類はすべて無毛と記載されている。

ところが東大、京大などの腊葉室の標本について当てみると、意外にも北は樺太敷香から南は九州阿蘇山まで毛のある形は全分布地域内に点々と見られることを知った。また大陸産はほとんど無毛であるが、朝鮮からは3枚の有毛品があった。赤花のホソバアカワレモコウ *S. parviflora* var. *coccinea* Koidzumi のタイプもまた有毛品である。ワレモコウも通常無毛であるが、時に葉下面に毛のあるものがあってウラゲワレモコウ *S. officinalis* var. *pilosella* Ohwi と名付けられている。ナガボノシロワレモコウの同様な変異に対しても学名をあたえておいてよいと思われる。

しかしナガボノシロワレモコウ類は変化に富み多形であるので早くから幾つかの変種が記載されており、更に命名上の問題がからんでその取扱いが厄介なものである。*S. tenuifolia* Fischer の学名は Link によって初めて正当に発表され、ベルリン植物園に植えられていたものに基いて、小葉は 'ovate lanceolata', 花は 'rubescens' と記載されている。

この類の中でワレモコウと比べて最もはっきり区別できる型はコバナノワレモコウ var. *parviflora* Maxim. であり、小葉は狭長で柄は短かく花穂も細長く径 5-7 mm (雄蕊を除いて) ばかりで先が垂れ下がり花は白色で花糸は長く平たく萼片の2倍近くになる。そこで Hultén (1929) は Link の *S. tenuifolia* は純粋な種ではなくコバナノワレモコウとワレモコウとの雑種であると考えたが、*S. tenuifolia* の名はコバナノワレモコウに限定して使っている。日本でもナガボノシロワレモコウと呼ばれている型は花穂が太く径 1 cm 内外あり小葉は幅広くなるもので、また時々花が赤味があったものがあってその形にはナガボノアカワレモコウの名がつけられている。これらコバナノワレモコウとワレモコウとの中間のような形質をもっているすべての形を雑種群として扱う Hultén の考は一応もっとものように思われ、北川博士 (1958) やソビエトの学者 (1941 など) はこの説を支持している。

一方、日本では穂の太いナガボノシロワレモコウは北海道など北地に普通で、コバナノワレモコウの型は西日本に多いといわれているが、それほどはっきりすみ分けているものではない。コバナノワレモコウの型は関東にも所々にあり、北海道でも時にこれにあたる形が見られ、両者をはっきり区別することは難しい。またワレモコウが見られない所にも穂の太い形が生育しており、コバナノワレモコウはより湿潤な場所に多いようである。従って穂の太いものや小葉の広いものを全部ワレモコウとの雑種と考えるよりは、コバナノワレモコウとナガボノワレモコウは同一種中の変異であるとみる方がよいと思う。ナガボノシロワレモコウの和名は、初めはこの両形をふくめて付けられた名である。*S. tenuifolia* の名の厳密な適用についてなお疑問が残るが、今の所この名を種名に用いておきたい。

有毛品はどの型にも見られるが、一番はっきりしたコバナノワレモコウ型の有毛品にケナガボノシロワレモコウと名付けておく。

Sanguisorba tenuifolia Fisch. ex Link, Enum. Pl. Hort. Berol. 1: 144 (1821), p. p.—Hultén, Fl. Kamt. 3: 87 (1929)—Hara in Bot. Mag. Tokyo 49: 205 (1935), p. p.

var. *parviflora* Maxim., Prim. Fl. Amur. 94 (1859); in Bull. Acad. Sci. St.-Pét. 19: 161 (1873).

S. parviflora (Maxim.) Takeda in Journ. Linn. Soc. 42: 462 (1914), in observ.—Juzepeczuk in Fl. URSS. 10: 427 (1941).

f. *pilosa* Hara, f. nov.—Foliola subtus pubescentia, pilis patentibus. Cetera ut in var. *parviflora*.

Type. Honshu. Pref. Gunma: in wet places, Horiku, Tatebayashi-shi (T. Matsuzawa, Sep. 23, 1977 in TI).

Distr. Korea, Saghalin, Hokkaido, Honshu, Kyushu.

Hultén (1929) pointed out that the type of *Sanguisorba tenuifolia* Fisch. ex Link is probably a hybrid between the two pure species, *S. officinalis* L. and *S. tenuifolia* var. *parviflora* Maxim., and all plants with any intermediate characters between the two which had been called as *S. tenuifolia*, var. *alba* Trautv. et Mey., var. *purpurea* Trautv. et Mey., var. *grandiflora* Maxim., and var. *kurilensis* Kudo were treated as hybrid swarms between the two. In Japan too, this group is very variable. *S. parviflora* occurs scatteringly throughout Japan. A form with broader leaflets and thicker spikes with larger white flowers than those of *S. parviflora* prevails in the northern parts. I wish to treat them as variants of a polymorphic species, for which I wish to retain the name *S. tenuifolia*.

24) シロバナレンリソウ (新称) 紫紅花を開くレンリソウのいわゆる白花品が那須地域で生物学御研究所の川村文吾氏によって正常品と共に採集された。白花品といってもこの場合には花はうすい黄色をおびている。

Lathyrus quinquenervius (Miquel) Litvinov

f. *albescens* Hara, f. nov.—Flores albidis pallide lutescentes.

Honshu. Pref. Tochigi: along Nakagawa R., Mukada, Karasuyama-machi, Nasu (Bungo Kawamura, May 25, 1976—type in TI).

最近本誌にも白花品の記事がしばしばのるが、これは学問的にはささいな変異で重要なものとはいえない。しかし白花はやはり人目をひき、観賞的価値の高いものもあるので、通信の便宜上諸外国でも学名がつけられているのが現状である。ただ一口に白花品といっても純白の花を開き植物体全体にあかい色素を欠くものから、花は白くみえるがよく見ると花弁の下部がわずかに赤味をおびるものなど厳密にいうと色々の

ものがふくまれている。しかしこのような細かい差異を標本で区別することは不可能であり、生品でも見落される場合もあって、花色の細かい変異を一々区別して学名をあたえることは繁雑であるばかりでなく、現実には標本の同定もできない。このようなことは花色の場合だけでなく、毛の有無や多少、葉の大小・広狭、花の大小、果実の色などの諸変異に命名された場合にも同様で、必ずしも極端形を基準に命名されているとは限らず、色々の細かい差異が見られてもそれらに別々の学名があたえられている場合は反って少ない。多くはある幅をもった変異をまとめて一分類単位として同じ学名の下に扱われる。白花品の場合も、通常紅紫花を開く種で、一見白く見える花をつけたものに命名された場合には、純白花のものからわずかに色のついたものまでをふくめて同一学名を用いて扱うのが適当であると思う。例えばノハラクサフジの白花品に本誌 52: 106 (1977) で名づけられたシロバナノハラクサフジは、1958年に発表された花の淡紅白色のものにつけられた *Vicia amurensis* Oettingen f. *alborosea* Sugimoto の中にふくめたい。なおノハラクサフジの普通品の花は新鮮な時は紅紫色で青紫色ではない。またハマエンドウの白花品も純白のものと旗弁がわずかに紫紅をおびるものとが知られているが、それらをまとめてシロバナハマエンドウ *Lathyrus japonicus* Willd. subsp. *japonicus* f. *albiflorus* Tatewaki (incl. f. *albescens* (Makino) Ohashi et Tateishi) と呼んでよいと考える。

25) オギノツメ 日本では本種の学名として *Hygrophila lancea* (Thunb.) Miq. がずっと使われてきた。ヒマラヤの標本を整理していてオギノツメに非常によく似たものが、*H. salicifolia* (Vahl) Nees と呼ばれていることに気付いた。文献をあたるとすでに1867年に T. Anderson は *H. salicifolia* の分布の中にはっきりと 'Japonia!' と引用している。一方台湾では *H. lancea* と *H. salicifolia* の両方が産することになっており、後者にはヤナギハグロの和名があたえられている。この類は非常に変異に富み、特に葉の形と大きさ、葉・苞・萼などの毛の量が変化することが古くから知られている。分布の端にあたるためもあって、日本のオギノツメは比較的安定した形質を示し、葉はほぼ披針形で面はほとんど無毛で多くの条線がある。ヒマラヤにもオギノツメによく一致する形が見られる。葉面や苞などに毛が多くなった形はインドその他で普通に見られ、台湾にもあってケヤナギハグロ *H. pogonacalyx* Hayata の名がつけられている。色々検討した結果、上記のものはすべて同一種として取扱うのが妥当であるという結論になった。ここで一寸厄介なのは命名上の問題で、'lancea' と 'salicifolia' の両種名は偶然にも共に 1794 年に発表されていて、どちらが早いかわからない。日本人には少し不便であるが、より広い地域で早くからよく知られている *H. salicifolia* の名をとることにする。更に種を非常に大きくとると、葉が倒卵状長楕円形で毛が多い *H. erecta* (Burm. f.) Hochr. と同種とする考もでてくるだろう。

Hygrophila salicifolia (Vahl) Nees in Wall., Pl. Asia. Rar. 3: 81 (1832);

in DC., Prodr. 11: 92 (1847)—Wight, Icon. Pl. Ind. Or. 4: t. 1490 (1850)—T. Anders. in Journ. Linn. Soc. 9: 456 (1867), p. p.—C. B. Clarke in Fl. Brit. Ind. 4: 407 (1884)—Matsum. et Hayata, Enum. Pl. Formos. 290 (1906)—Yamazaki in Fl. E. Himal. 302 (1966)—Fl. Hainan. 3: 545, f. 919 (1974)—Icon. Cormophyt. Sin. 4: 154, f. 5722 (1975).

Ruellia ringens L., Sp. Pl. 2: 635 (1753), quoad specim. in Herb. Linn. tantum.

Ruellia salicifolia Vahl, Symb. 3: 84 (1794)—Roxb., Fl. Ind. ed. 2, 3: 50 (1832).

Justicia lancea Thunb. in Trans. Linn. Soc. 2: 338 (1794).

Hygrophila angustifolia R. Brown, Prodr. Fl. Nov. Holl. 479 (1810).

Hygrophila lancea (Thunb.) Miquel in Ann. Mus. Bot. Lugd.-Bat. 2: 123 (1865)—Matsum., Ind. Pl. Jap. 2(2): 580 (1912)—Hara, Enum. Spermat. Jap. 1: 294 (1949)—Kitamura et al., Col. III. Herb. Pl. Jap. 1: 118 (1957)—Ohwi, Fl. Jap. ed. rev. 1229 (1965)—Walker, Fl. Okinawa 952 (1976).

Hygrophila pogonacalyx Hayata, Icon. Pl. Formos. 9: 81 (1920).

Distr. India, Himalaya, Indo-China, east to S. China, Taiwan and S. & C. Japan, and Malaysia.

Very variable in the shape and size of leaves and the hairiness of leaves, bracts, calyces and corollae. In Japan it occurs only a form with almost glabrous lanceolate leaves, and it has always been treated as *H. lancea*. But the same form is also found in Himalaya and other regions. Both specific epithets, 'salicifolia' and 'lancea', were published in 1794, and I adopt 'salicifolia' which is well-known in the wider districts.

□木村陽二郎氏 Dr. Yojiro KIMURA

本誌編集員である木村陽二郎博士はフランス政府からパルムザカデミック勲章 (Palme Académiques) のシュヴァリエ章 (Chevalier) を1977年8月22日付で授与され、その伝達式が本年7月7日東京のフランス大使館で行われました。この勲章は1808年ナポレオンがフランス帝国大学を創立したと同時に制定された由緒あるもので、学識ある教育の功労者に与えられ現在に至っています。木村博士は1954年ちょうど国際植物学会議がパリで開かれた時に国立自然史博物館で一年間植物分類学および生物学史を研究され、1957年12月19日には同館の通信会員に選ばれました。また日仏会館会員、日仏生物学会幹事として日仏文化の交流発展に尽され、その功績が認められて今回この勲章を受けた最初の日本植物学者となられたことは誠に喜ばしいことで、ここに心からお祝いを申し上げます。

(原 寛 Hiroshi HARA)